
シンポジウム 8

マルチモダリティ治療の坂と雲 ～進行前立腺癌・進行腎癌～

座 長 秦 聡 孝 (大分大学医学部 腎泌尿器外科学講座)
杉 元 幹 史 (香川大学医学部 泌尿器・副腎・腎移植外科)

司会のことば

“開花期”の令和泌尿器科において、進行前立腺癌・進行腎癌に対するさまざまな新規薬物の登場や放射線療法の発展は目覚ましく、手術療法も加えたマルチモダリティ治療への期待はきわめて高い。いかにこうしたマルチモダリティ治療を駆使して「総力戦で制御する」のか？「総力戦」に投入できる治療モダリティは多様化し、かつそれぞれが強力になっているが、患者さんに最大のベネフィットをもたらすためには、何を、どのような順番で、あるいはどのように組み合わせて戦うべきなのか、われわれ令和の泌尿器科医には、洗練された「戦術」が求められている。本シンポジウムでは、前立腺癌・腎癌それぞれ3名ずつの新進気鋭、論客ぞろいのシンポジストに、各施設での取り組みや最新の話題を交えて、ご講演いただいた。進行前立腺癌・進行腎癌に対するマルチモダリティ治療の眼前の到達点である「坂の頂」は根治や生存率の改善であろうが、ではその遥か向こう、大空に浮かぶ「雲」とは何か？各シンポジストの考える“坂の上のさらに向こう”にある夢にもぜひ注目していただきたい。

進行前立腺癌について、まず久留米大学の名切信先生に高リスク・局所進行性前立腺癌に対する密封小線源療法を中心とした治療戦略をご紹介いただいた。自施設のデータから、小線源療法に外照射および内分泌療法を併用する三者併用療法がきわめて良好な治療成績を示し、効率的に局所制御が可能であると熱く語られた。

続いて、香川大学の加藤琢磨先生には転移性ホルモン感受性前立腺癌(mCSPC)について、Triplet療法など最新のエビデンスに基づいた、先手必勝の「総力戦」を展開していただいた。多くの治療選択肢があるなかで、いかに治療効果をあげつつ、副作用を低減できるかが重要であり、そこがわれわれ泌尿器科医の腕の見せどころであると強調された。

最後に、産業医科大学の富崎一向先生には、あいかわらず手強い転移性去勢抵抗性前立腺癌(mCRPC)に打ち勝つための、遺伝子情報に基づいた個別化医療を含めた最新の治療ストラテジーを整理していただいた。私見を交えて近未来の方向性についても予想していただいたが、はたして現実はどうなるか、5-10年後に改めて振り返ってみたい。

進行腎癌については、はじめに愛媛大学の三浦徳宣先生に近年の免疫チェックポイント阻害剤を基軸とした新規薬物療法への期待や現状の課題を概説いただいた。現行の腎癌治療のアンメットニーズにいかに向き合い、今後克服していくのか、具体的かつ示唆に富むご講演をいただいた。

続いて、大分大学の井上享先生には自験例を織り交ぜて、IO(Immuno-oncology)時代の腎摘除術の意義について再考していただいた。いわゆるcytoreductiveな腎摘除術と薬物療法を併用することで根治を目指す腎摘除術とをきちんと区別したうえで、その意義を議論することが重要であろう。

最後に、放射線治療医の立場から、東京都立駒込病院の伊藤慶先生に腎癌の転移に対する体幹部定位放射線治療(SBRT)について、最新の話題をご提供いただいた。SBRTのオリゴ転移に対する高い局所制御効果と低毒性に加えて、多発転移を有する症例に対する免疫賦活化を目的としたSBRTの有用性にも触れていただいた。

全体を通して、マルチモダリティ治療の発展により、令和期の泌尿器科では進行前立腺癌・進行腎癌であっても根治や生存率の改善が期待でき、併せてQOLの向上も望める時代になると確信できる講演内容であった。今後も、新たな治療モダリティが開発されることは自明の理であり、われわれ泌尿器科医は、さらに多様化する患者選好にしっかり応えられる治療戦略をつねに考え続けなければならない。